

ような体験をするのだと確認する媒体として用いているのかもしれないと思うと、見方は変わった。ともすると湿っぽくなりがちな話題を、災難にみまわれた人自身が「なんてことないさ」と笑ってのける、あるいは「笑ってなきややってらんない」といった具合にやりすごしているかのような彼らのユーモアともいえる感覚は、悪くないと思うのである。

引用文献

- Barr, L. I. 1965. *A Course in Lugbara*. Nairobi, Kampala, Dar es Salaam: East African Literature Bureau.
- Dalfovo, A. T. 1982. Lugbara Personal Names and Their Relation to Religion, *Anthropos: Revue Internationale D'ethnologie et de Linguistique* 77: 113-133.
- 梶 茂樹. 1985. 「テンボ族における個人名一言語人類学的考察」『季刊人類学』16(1): 47-88.

- 木村大治. 1996. 「ボンガンドにおける個人名」『アジア・アフリカ言語文化研究』52: 57-79.
- 小森淳子. 1999. 「ケレウェにおける個人名と忌避名」『スワヒリ & アフリカ研究』9: 21-43.
- Middleton, J. 1961. The Social Significance of Lugbara Personal Names, *The Uganda Journal* 25(1): 34-42.
- Sugawara, K. 2016. Personal Name as Mnemonic Device or Conversational Resource: An Ethnographic Study on the Naming Practice among the GÇ ui and GÇ ana San (Natural History of Communication among the Central Kalahari San), *African Study Monographs*, Supplemental Issue 52: 77-104.
- Uganda Bureau of Statistics (UBOS). 2014. *National Census Main Report*. Uganda Bureau of Statistics.
- United Nations High Commissioner for Refugees (UNHCR). 2016. *South Sudan Regional Refugee Response Plan*. United Nations High Commissioner for Refugees.

現代ヨルダンによる宗派・宗教間対話のイニシアティブ

池 端 蒨 子*

2016年8月、私は2年ぶりにヨルダンのクイーン・アリア国際空港に降り立った。空港の出口には、首都アンマンの中心部まで旅行者を運ぶタクシー運転手がわらわらと群がり、定価の数倍の値段をふっかけてくる。2年前に初めて訪れた際には押しの強い彼らに

翻弄されてしまったが、今回は彼らの波をうまくかわし、バスでアンマンへと向かった。

今回の調査では、21世紀以降ヨルダンが国家主導で推進する、宗派・宗教間の対話を模索する運動を対象とした。ヨルダンの正式名称は「ヨルダン・ハーシム王国」であ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

り、そのハーシム王家は預言者ムハンマドから脈々と連なる血筋を誇る。宗派・宗教間の対話において特にイニシアティブをとるのは、現国王アブドゥッラー2世とその従兄弟でありウラマー（イスラーム諸学を修めた学者）の資格も有するガーズィー王子である。国民のほとんどはスンナ派に属し、キリスト教徒も2~6%とされているが、両者は共存している。領土としても、GDPにおいても小国であるにもかかわらず、近年のヨルダンが発揮している宗派・宗教間対話におけるイニシアティブは、イスラーム世界全体の中で際立っている。私がまず足を運んだのは、主要な活動を担うNGO、The Royal Islamic Strategic Studies Centre（以下RISSC）のアンマンにある事務所であった（写真1）。

中道を志す

RISSCは、宗派・宗教間の対話に関する出版物の制作・出版や、シンポジウム・ワー



写真1 政府系NGO、The Royal Islamic Strategic Studies Centreの事務所玄関

クショップの開催を行なっている。RISSCはNGOではあるが、ヨルダン王家との結びつきが非常に強い。ヨルダンにおけるNGOにはしばしばあることだが、RISSCは王族の主導によって立ち上げられ、設立後も王族との関係が深い。王族と関係をもつことは政府との関係があることを意味する。ヨルダンは王国であり、政府・議会において国王アブドゥッラー2世が有する権限は強く、そのレジティマシーは王族のさまざまな宗教的・政治的・慈善的活動によって支えられている。こうした活動を目的としたNGOを王族が主導して立ち上げることも、その一環といえる。RISSCに勤め、私のインタビューに答えてくれたアシスタント・ディレクターは、「非政府組織だから政府からは資金提供はないが、国王個人からの資金提供がある」と明かしてくれた。また、RISSCからの出版物は、最終的にガーズィー王子の査読を経て出版されることもインタビュー調査から判明した。ここからも王族と当NGOとの関わりの深さが明らかとなった。

国家としてヨルダンが開始した主要な運動は2つある。2004年に始まった宗派間の対話を促す運動「アンマンからのメッセージ（The Amman Message）」と、2006年以降続けられている宗教間、特にイスラームとキリスト教との対話の必要性を説く運動「私たちとあなたたちの間の共通の言葉（A Common Word between Us and You）」である。いずれも前述の国王アブドゥッラー2世とガーズィー王子の主導により行なわれた。RISSCはこの2つを書籍として出版し、

いずれも当 NGO のホームページにおいて PDF 版で無料公開されている。

RISSC の目標には、ワサティーヤの実現が挙げられている。ワサティーヤとは、アラビア語で穏健、中道を意味し、英語では moderation と訳される。近年はいわゆる「過激主義」がクローズアップされているが、それと対置される概念である。当 NGO でのインタビューにおいてこのことについて尋ねると、次のような比喩を話してくれた。「人間の手は、真ん中にある中指が一番長い。これと同じで、何事も中道が至高なのだ。」アルカイダや IS などの「急進派」、「過激派」の勃興以降、いわゆる穏健派、中道派の重要性が叫ばれている。この比喩は、中道の重要性を強調することばのひとつとして興味深いものであった。

イスラーム ≠ 暴力

「アンマンからのメッセージ」と「私たちとあなたたちの間の共通の言葉」の 2 つの運動の中で行なわれたのは、宗派・宗教間の対話の必要性をクルアーンや聖書に則って論じ、それに対する賛同を募ってコンセンサスを形成するというものであった。これらは複数の国際会議で国王によって提起され、宗派・宗教を超えて、各国の政府指導者や宗教指導者から賛同の署名を多く集めた。インターネット上でも署名活動が行なわれ、これは現在も続いている。

イスラームにおいてウンマ（イスラーム共同体）はひとつであることが自明視されている。もちろん国家は複数に分かれており、欧

米や日本などの非イスラーム国家にもムスリムは散らばっている。しかしイスラームにおいては、ムスリムの連帯が重要視される。ヨルダンの立場では、IS のように自分たち以外は不信仰者、異教徒であると断罪し（これをアラビア語ではタクフィールという）暴力に及ぶ行為は、このウンマの分断を招く行為である。「アンマン・メッセージ」はこのタクフィールそのものを否定し、中道に基づく正しいイスラームのあり方について語ることでウンマ全体のコンセンサス形成を図っている。

「共通の言葉」では、イスラームとキリスト教の共通点として「神への愛」と「隣人への愛」が挙げられる。イスラームを暴力的な宗教とみなす批判に対して積極的な反論を行なうものである。ヨルダンは、国内のキリスト教徒マイノリティとの共存が実際に成功していることをアピールし、「共通の言葉」イニシアティブに説得性をもたせている。私はその真偽を確かめるべく、キリスト教徒が多く暮らす都市マダバへ足を運んだ。

ヨルダンとキリスト教

マダバへは、首都アンマンからバスで 1 時間ほど南に下る。朝夕にはキリスト教会の鐘の音が響き、レストランでは各種のワインが売られている。マダバで最も有名な教会は聖ジョージ・ギリシア正教会である（写真 2）。この教会の内部の床には、19 世紀に教会の建設過程で発掘され、6 世紀頃に作成されたと推定されるモザイク画地図が残されている（写真 3）。地図中には当時の聖地エルサレムの様子も詳細に描かれており、考古学



写真2 聖ジョージ・ギリシア正教会外観



写真4 アル＝マグタスにて、ヨルダン政府が整備を行なったイエス洗礼の地。



写真3 聖ジョージ・ギリシア正教会内部

的史料としての価値も高い。マダバはヨルダンにおける観光スポットのひとつであり、欧米からの観光客も多くみられた。

地元で土産物店を営む60～70代の男性に、「ヨルダンでのキリスト教とイスラームとの関係について知りたい」というと、店の玄関先に椅子を2脚出し、店の奥からお茶を入れて持ってきてくれた。話をしてみると、彼はキリスト教徒で、マダバに生まれ育ったという。イスラームについて話を振ると、近年のISによるヤズィーディー教徒迫害に心を痛めている様子で、イスラームは良くない、

キリスト教こそがよい宗教、と語る。「では、ムスリムばかりのヨルダンでは暮らしぶらいのか」と尋ねると、「ヨルダンでは国王のおかげでキリスト教徒も平和に暮らせるのだ」と答えた。社会的共存はともあれ、政治的には王政の下で共存が保たれていることについて、一定の評価をしている様子が窺えた。

ヨルダンには近年、キリスト教徒が好んで訪れるような観光スポットがひとつ増えた。それはマダバから車で西に約1時間走った所にある、ヨルダン川に面した都市マグタスである。ここでは近年発掘作業が進められた結果、イエスの洗礼の地としての考古学的価値が認められ、ヨルダン政府による整備も行なわれ、さらにヨルダンの申請により2015年に「ヨルダン川の向こう側、ベサニア（アル＝マグタス）」として世界遺産に認定された（写真4）。国王アブドゥッラー2世とガーズィー王子は、この地にローマ教皇やギリシア正教会司教など諸派のキリスト教指導者を何度も招き、ヨルダンがキリスト教徒、及びキリスト教遺産の保護者としての役割を果た

していることを強調している。

ヨルダンのキリスト教遺産保護はヨルダン国内にとどまらない。隣国イスラエルの占領下となっている聖地エルサレムの保護について、ヨルダンは影響力をもち続けている。岩のドームやアクサー・モスクの保全に加えて、同じくエルサレムに位置する聖墳墓教会の再建を行なったのはヨルダンである（写真 5, 6）。イスラームとキリスト教の平和・共



写真 5 エルサレムにて。聖墳墓教会外観。



写真 6 聖墳墓教会内部。イエスが埋葬され 3 日後復活したとされる石墓。

存を説くメッセージを発するだけでなく、実際にキリスト教遺産を保護し、国内キリスト教徒との共存を行なってきたという事実は、そのメッセージに正当性を与えている。

ヨルダン王家の戦略としての「対話」

これらの「対話」はすべてヨルダン王家によって牽引されており、政治戦略としての意味合いが強い。政治戦略としての狙いのひとつとしては、王家の正当性を高め、国内外からの評価・支持を上げることが考えられる。ヨルダン王家は、預言者ムハンマドの直系の子孫であることをアピールし、聖地エルサレムの保護者として振舞い、そして国内外のキリスト教遺産を保護し、国内のキリスト教徒との共存にも成功していると主張する。さらに「アンマン・メッセージ」や「共通の言葉」イニシアティブにおいては中道派の正しいイスラームのあり方を説き、コンセンサスの形成においてリーダーシップをとる。もうひとつの狙いとして考えられるのは、他のスンナ派諸国との競争関係の中で、宗派・宗教間対話においてその存在感を高めることである。サウディアラビアやモロッコ、カタールなどもヨルダンと同様に「宗教間対話外交」を行なっている。それぞれの国がそれぞれの独自性を打ち出しているのだが、ヨルダンの強みはキリスト教を内に有し、「キリスト教の保護者」として自身の成功例を背景として平和的なメッセージを打ち出せるところにある。

さらにいえば、確かにこれらの動きは王家の政治的意図をもつパフォーマンスではあるものの、イスラームにおける穏健派、中道派

の真摯な試みとしての意義も確実に存在している。対立，暴力ばかりがクローズアップさ

れる一方で，このような対話を志す動きがあることも見逃してはならないだろう。

サッカーにみるパレスチナ人と難民

岡 部 友 樹*

チリのサッカーチームである *Club Deportivo Palestino* が背番号に歴史的パレスチナの地形を模った「1」を使用し，話題を呼んだことはあまり知られていない。このチームはもともとチリに移住したキリスト教徒のパレスチナ人が主体となり 1920 年にサンティアゴで結成したものである。また *Bank of Palestine* がこのチームのスポンサーとなり，近年ではパレスチナ西岸地区へのツアーを企画するなど，国際的なつながりを強めている。サッカーという世界中に広がった庶民の親しみのあるスポーツは，国境を越えて人々のアイデンティティを想起させる。そして本稿で描くヨルダンのパレスチナ難民とイスラエルのパレスチナ人は，サッカーというレンズを通すことによって異なるアイデンティティの表出の仕方がみられるのである。

筆者は現在東アラブ地域（現在のシリア，レバノン，イラク，パレスチナ／イスラエル）におけるパレスチナ難民に関して研究を行なっている。本稿では 2016 年 8 月～10

月にかけてのヨルダンおよびパレスチナ／イスラエルでのフィールドワークをもとに，サッカーを通してパレスチナ人のアイデンティティの一側面を検討したい。

9 月 3 日日曜日の正午，私はヨルダンの首都アンマン郊外のアシュラフィーエの丘に登ったところにあるワヘダート難民キャンプに赴いた。アシュラフィーエの丘からは首都のアンマンを一望することができ，近くには赤十字病院や，少し歩くと 18～19 世紀に強



写真 1 日曜日のワヘダート・キャンプのスクの様子

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科